

# 淨瑠璃文學に現れたる淨土教信仰

大 橋 清 三

## 一

淨瑠璃は、元祿時代に、大阪で大成された、最大の庶民藝術の粹であり、華であつた。當時の大阪は關西のみならず、日本の經濟文化の中心地であり、その勢力も江戸や京都を遙に凌駕してゐた。その爲に、大阪は、全く町人權勢の町であり、近世前期の文化を代表する元祿文化も、彼等に依つて生育された。その代表的產物である、この淨瑠璃も、彼等町人の間に育くまれた事は云ふを俟たない。

然らば、淨瑠璃は、いかにして生れ、發達したものであるか。所謂人形淨瑠璃の起源は、人形劇と語物の二つの要素の結合にあつたのである。

而して、この語物には、淨瑠璃節と説教節の二があつて、これが一方に於て人氣を得て來た、木偶の人形操りと、必然的に握手するに至つた。その結果、渾然たる人形淨瑠璃と云ふ、一つの藝術が生れたのである。

されば、人形劇と結託する迄の淨瑠璃節と説教節は、純然たる語物であつて、復の淨瑠璃とは、異つて舞臺や戯曲形式から全く離れたものであつた。即ち淨瑠璃節は古の史譚、特に戦記物を情事的、大衆的に興味深く脚色したもの、或は謡曲や幸若から脚色されて出來た、庶民的な語物であつた。又、説教節はその名に示せる如く佛教的傳説、縁起物、高僧傳、神佛の靈驗譚を、解り易く庶民階級に説いた語物であつた。又淨瑠璃節と雖も、相當佛教的な傾向を持つてゐた。

かくの如くして、兩者が、人形淨瑠璃に融合したのであるから、その發生より考へれば、淨瑠璃は極めて宗教的な產物であつた。併し乍ら、時の經つに従つて、淨瑠璃の内容外觀に著しい變化が見られ、舞臺的、戯曲的に次第に發展し、それが近松門左衛門の出現に依つて、一大飛躍を遂げ、舞臺藝術として一應完成し、その後専ら娛樂的對象として進んで行つた。

これと共に、漸次、宗教的色彩が薄くなつて行つたのは、當

然であり、前の淨瑠璃節や説教節と、全然趣の異つたものになつた。即ち宗教的産物から純藝術乃至娛樂的所産に進んだのである。扱てここで云ふ宗教は勿論佛教である。

徳川幕府が佛教を以て、國民の宗教的統一を行つたのは、基督教に對する、止むを得ざる政策でもあつたが、佛教の精神に依つて、國民の「和」を保たさせやうとした事も見逃せない事實である。前述せし如く、淨瑠璃の初期は、非常に佛教的であつて、全く布教を目的としたものの如く思はれるのが、多く見出されるくらいである。それ程、既に、當時に於て、佛教信仰が庶民階級の生活に滲透してゐたのである。

淨瑠璃に於ける佛教信仰の内容は、極めて多種多様である。特に初期の淨瑠璃に於ては、あらゆる宗派を網羅してゐる。而してその中で、淨土教(念佛)信仰と、法華經信仰が大部分を占めてゐる。次いで、近松の作品になると、法華經信仰が壓倒的に多い。これは、主に時代物で、世話物に於ては、淨土教信仰が歓迎されてゐる。併し近松以後になると、急に佛教的色彩が薄らいで行くと共に、その數も少くなつた。

淨土教信仰と淨瑠璃の關係は、やはり初期の所謂古淨瑠璃に於て最も密接にして、深いものがある。

次に、これを古淨瑠璃、近松と海音、近松以後の三項に分つ

て具體的に述べる事にする。

## 二

古淨瑠璃と云ふのは、大體近松の「出世景清」(貞享三年)以前の淨瑠璃を總稱するのである。即ち古淨瑠璃と云はれる所以は、未だ語物の領域を脱せず、舞臺的、戲曲的に幼稚であり、藝術としても、とり立てて云ふべきものもない。

併しその反面、佛教的色彩が濃厚で、宗教的には大いに見えるべきものである。先に述べた如く、高僧傳、縁起物、靈驗譚がその主な題材となり、その外に所謂本地物と稱されるものが多い。

特に、これらの傾向の作品は、説教節から來たものが大半でその有名なものには、荻萱、梅若松若、愛護の若、小栗判官、山椒太夫があり、何れも人口に膾炙されてゐる。これらは、淨土教とは關係が薄いが、淨土教に關するものは、實は比較的多い。それを次に拾つて見る。

「阿彌陀胸割」(慶長)、「曇鸞記」(寛文)、「天じんぼさつ」(延寶)、「法藏比丘あみだの本地」(天和)、「四十八願記阿彌陀の本地」(貞享)。

最初の二つは、説教節から來たものである。中でも、「阿彌陀胸割」は有名なもので、最も古く、幾度も作りかへられてゐ

る。これは、印度を舞臺として、阿彌陀信仰の功德を端的に表現してゐるもので、觀音の身換りと同じく、阿彌陀が身換りとなつて胸を割ると云ふ物語になつてゐる。「曇鸞記」、「天じんぼさつ」は共に、高僧傳を參酌して、淨瑠璃の世界に移して作り、傍ら淨土教信仰を鼓吹してゐる。「法藏比丘あみだの本地」「四十八願記阿彌陀の本地」は、何れも、無量壽經から材を得てそれを本地物の形式を借りて表現し、阿彌陀信仰を勧めてゐる。

これらの古い淨土教を取扱つてゐるものは、他のものに比して、可成り多いのである。

次に、法然上人と親鸞上人を主題とした淨瑠璃を擧げる。

「しんらんき」(寛永)、「淨土さんたん記」(寛文)、「他力本願記」(延寶)、「鳥羽戀塚物語」(延寶)「念佛往生記」(貞享)、

初の三作には、法然上人と親鸞上人が共に登場せられ、親鸞上人の方が主となつてゐる。これは、全く眞宗の布教を目的とした如くに見られるもので、親鸞上人の傳記が中心となつて、幾多の宗教的紛飾が行はれてゐる。併し、法然上人に於ては、親鸞上人の如き傳記が中心となつた個人的な作品は見當らない、即ち部分的に活躍されてゐるのである。後の二作は、近松門左衛門の初期の作品で、何れも源平時代を背景にしてゐる事

は云ふ迄もない。「鳥羽戀塚物語」は、文覺上人、俊乗坊重源、光明房の三人に依つて物語は、すすめられてゐる。「念佛往生記」は、「大原問答青葉笛」とも云はれ、熊谷蓮生坊が中心人物となり、彼の往生する迄の晩年を書いたもので、その中に、九品の淨土の様相や、大原問答の場面を挿入して、佛畫、經論に依つて、佛語を多く織りませ、名文を以て、詳しく述べられてゐる。法然上人は、この作品に於て、最も偉大な姿が見られる。

全く、淨土宗としては、代表的作品である。

かくの如く、源平時代の作品は、後に於ても、比較的、法然上人一門の人との交渉が多く、特に熊谷物は多く、その中には必ず法然上人との關係、念佛信仰の描寫は、つき物で、多少とも必ず現れるのである。

以上、要するに古淨瑠璃に於ては、淨土教關係のものが割合に多く、その内、眞宗の布教的作品が多くを占めてゐる事を注目すべきである。

### 三

近松門左衛門は、淨瑠璃の作者として、最高の地位を占め、日本の生んだ最大の劇詩人として、世界的に有名である。彼は淨瑠璃の完成者となり、元祿から享保に至る所謂淨瑠璃の黄金

時代を築いたのである。彼の偉大さは、その卓越せる頭腦に依つた事は勿論であるが、更にそれを助けたのは、深い學識であつたと云ふべきである。實際彼の作品に接すると、驚くべき程豊富な詩藻に依つて充滿されてゐる。彼は、和漢、佛儒の學に各々通曉してゐた事が解る。而して、彼が淨瑠璃の文學的價值を昂揚した功績は、特筆大書すべきである。

扱て、佛教に關しても、非常に造詣が深く、多くの佛典中から、その經文を引用してゐる所から、桑門の出身と見られるくらいである。その佛典として、大智度論、法華經、淨土三部經、往生要集その他、擧ぐるに違がない。中でも、法華經、淨土三部經は最も數の多いものである。又、佛教一般を主題とするものに、「釋迦如來誕生會」がある事を忘れてはならない。

次に、近松の時代物を見て、第一に氣注く事は、法華經信仰の多い事である。それも主に普門品で、觀世音信仰が壓倒的で、その代表的作品は、「出世景清」である。

淨土教信仰は、近松に於ては、法華經のそれに比べると、數も非常に少く、力も亦弱い。唯、彼の世話物の所謂心中物に於ては、部分的ではあるが、淨土教信仰の濃厚なる所が見られる。それは、道行や最後の心中の件に於て、名文を以て、現はされてゐる。その代表として次の二つを擧げる。

「生玉心中」の道行冒頭、

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛を頼ても、西を後に歩ね行、極樂淨土に背く共、利劍即是と聞時は、死する奴も彌陀の縁、南無阿彌陀佛の聲細く、云々。

「心中宵庚申」の道行最後、

……、心覺への西向に、千世は合掌手を合せ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛の、聲より早く引寄せて、云々。

かくの如く、心中の件では、念佛や、般若讃の「利劍即是」の文「光明遍照」の文、その外に「願以此功德」の文等が、しばしば使はれてゐる。これは、彼等の心中が、來世の一蓮託生を願ふ爲、この念佛や先に擧げた文が適ふからである。近松の世話物は、心中物が殆どであるので、勢ひこれらの最後の描寫は、同じ類である。この結果、後に心中物に限らず、切腹などの場合にも、以上の影響を多分に受けてゐる。

又、世話物は、社會の寫實劇であるから、當時の町人生活が具體的に寫されてゐる。特に近松の作品に於ては、それが顯著である。尤も大阪のみが舞臺となつてゐる。此の方面から、淨土教信仰を觀察して見やう。

「卯月の潤色」の與兵衛は、後に助給と名を改めて、念佛を行

じ、お龜の後を追つて淨土へ往生する、「心中二枚繪草紙」の市郎右衛門の父親は、本願寺の報恩講の講親である。

「女殺油地獄」に於ては、お吉の三十五日逮夜の日に、同行衆が和讃で、お勤めしてゐる所が寫されてゐる。

「心中宵庚申」の半兵衛の養父伊右衛門は、「淨土宗の願手、了海坊の談義に打込、開帳回向の世話やき仲間、見世は半兵衛に打任せて、大阪中の寺狂ひ、云々」と述べられてゐる。

又「夕霧阿波鳴渡」の上之巻の一節には、「伊右衛門小袖くるりと脱ければ、肌に袷の破れ紙衣、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、胴慄ふこそ哀れなれ」とあつて、完全に使ひこなされてゐる。このやうな例は、實際限りがない程多い。

かくの如く、當時の庶民間に於て、相當淨土教信仰が深く根ざしてゐた事が知られる。

以上述べた如く、近松の世話物に於ては、部分的には可成り多く淨土教信仰が見出される。

併し、近松の時代物に於ては、先に述べた如く法華經信仰に壓倒され、古淨瑠璃の項で述べた「鳥羽戀塚物語」、「念佛往生記」の外には、大したもの、見られない。これは、古の史譚に、淨土教信仰を取扱つたものが少ない事に起因するのであらう。

近松に對立した紀海音は、作品の數は近松より遙に少いが、内容上、近松に劣らない作者であつた。彼は一時、僧門に入つてゐたので、近松と同じく佛典に詳しく、又學識もあつた。それ故に、名文を以て近松に太刀打が出来たのであつた。彼は特に世話物に於て有名な作品を多く殘してゐる。彼の世話物も、心中物が多く、近松のそれと外觀上、似通つてゐる。

彼も、心中物の道行や、最後の件に、念佛や淨土教的な佛語を多く挿入して、形容してゐる。

「梅田心中」の最後の一節が代表的である。

しばし別れて末にあふ、一つ蓮はかはらじを、サア落付くぞなむあみだぶつと、しめよる一念邪正の七執は、大字のみ名に拂はれて、安樂淨土へ一飛の云々。

#### 四

近松、海音以後の淨瑠璃界は、竹田出雲が現れ、第二の黄金時代を作り、その後、近松半二が出て、大いに活躍するが、既にその頃衰退の氣運をはらんでゐた。その主要な原因は、淨瑠璃が内容外觀共に、一つ型にはまり、形式的に流れたからであつた。即ちその内容の價值よりも、娛樂的の見世物として、趣向を重んずる傾向になつた。換言すれば、劇詩から見世物へ移つたのである。而もこの見世物が、次第に人氣を失ひ、徳川末

期になると、既に古典劇としての位置に轉落して終つた。

かくの如き状態であつたから、その内容から見ても、決して向上はしなかつた。即ち、文學的價值が稀薄になつて、徒らに趣向を驅使して、目先の面白さを追ふのみになつた。時代物については、古淨瑠璃の燒直し、複雑化、それに趣向を出来るだけ奇抜にするのみであつた。世話物に於てさへ、人情、義理迄もが、一つの紋切形になり、又寫實の方面から云つても、近松海音に比べると、全く甚しい懸隔で、その背景が著しく狭く制限されるに至つた。

これが爲に、宗教的色彩が殆ど、影を没する始末になつた事は當然である。部分的な佛教信仰の描寫さへ、その數が減少して行つた。假令、あつたにしても、それはその原據である、古淨瑠璃に於て、既に述べられてゐたのである。

例へば、「荊萱桑門築紫轡」(享保)、「祇園女御九重錦」(寶曆)は、古淨瑠璃「荊萱」、「しんうんき」の複雑化、趣向化したもので、かくの如き例は枚舉に遑がない。

又世話物に於ては、前述せし如く、寫實が、疎かになり、専らその筋を追ふのみになつた爲、又その叙述が平易になつた爲特に近松の如き信仰生活の描寫や、佛語を多分に入れた名文は、殆ど皆無となつた。

それ故に、特に、とりあげて云ふべき程の宗教的作品は、無いと云つてよい。併し強ひて云へば、竹田出雲の如き初期の作者は、未だそれを全然失つてゐない、勿論それも非常に部分的で、而も少い。かの「管原傳授手習鑑」(延享)の佐太村の段に於る、櫻丸の切腹の件は、その最たるものであらう。

又、先に述べた「祇園女御九重錦」は、近松以後に於る淨瑠璃の中で、最も宗教的なものと云へる。これは、「三十三間堂平太郎緣起」と傍題されるもので、眞宗の宣傳的作品の如き感がある。最後の五段目では、淨土教的な文辭や親鸞、報恩講、本願寺等の文字を以て滿されてゐる。かくの如き作品が、この時代に生れた事は、奇異とせねばならぬ。

かくの如く、宗教的な色彩を失つた、この後の凡百の淨瑠璃は、精密に見れば淨土教信仰も、必ずしも少くはなからうが、それも結局は、念佛や、經文の二三句に止るのみで、淨土教信仰を、古淨瑠璃や近松の世話物迄に、盛り上げてゐるものは、絶無と云つてよからう。

(古淨瑠璃に關しては、若月保治著「古淨瑠璃の新研究も」による。)